第128回日本眼科学会総会　モーニングセミナー12

光をつなぐために

―糖尿病網膜症・黄斑浮腫の新しい知見―

日時　2024年 4月20日(土)　7:45～8:45

会場　第５会場　東京国際フォーラム ホールB5(2)

●オンデマンド配信 ‥‥2024年5月13日(月)正午～6月12日(水)正午予定

座長　坂本 泰二 先生　鹿児島大学医学部眼科学教室 教授

近年、糖尿病網膜症(DR)とその主たる合併症である糖尿病黄斑浮腫(DME)に対する診断・治療は飛躍的に進歩しています。病態の解明やイメージング技術による診断の進歩、そして、薬物・手術・レーザー治療の最適な治療選択法の開発など、糖尿病患者の光をつなぐための我々の弛まぬ挑戦はこれからも続いていきます。

本セミナーでは、DR・DME診療のお二人のエキスパート、髙村佳弘先生(福井大学)、中尾新太郎先生(順天堂大学)より、ご自身の研究から得られた最新の知見についてご講演をいただきます。

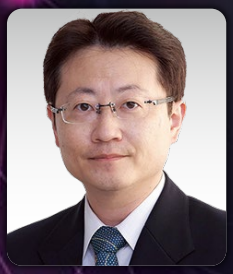
明日からの診療に役立ち、そしてDR・DME診療の未来が見えるセミナーです。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

講演1

糖尿病での失明ゼロを目指して

髙村 佳弘 先生

福井大学医学部眼科学教室 准教授



講演2

Diabetic Retinal Diseaseという考え方：これからの糖尿病網膜症診療

中尾 新太郎 先生

順天堂大学大学院医学研究科眼科学 主任教授

共催：第128回日本眼科学会総会／わかもと製薬株式会社

第128回日本眼科学会総会　モーニングセミナー 12

光をつなぐために

―糖尿病網膜症・黄斑浮腫の新しい知見―

日時　2024年4月20日(土) 7:45～8:45　会場　第5会場 東京国際フォーラム ホールB5(2)

●オンデマンド配信‥‥2024年5月13日(月)正午～6月12日(水)正午予定

座長

坂本 泰二 先生

鹿児島大学医学部眼科学教室 教授

【略歴】
1985年 九州大学医学部 卒業
1992年 九州大学大学院医学系研究科 修了
1992年 カリフォルニア大学ドヘニー眼研究所 客員研究員
2000年 九州厚生年金病院眼科 部長
2001年 九州大学大学院医学研究院眼科 講師
2002年 鹿児島大学医学部眼科学教室 教授
2020年 鹿児島大学病院 病院長
鹿児島大学 副学長(附属病院担当)

講演1

糖尿病での失明ゼロを目指して

演者

髙村 佳弘 先生

福井大学医学部眼科学教室 准教授

【略歴】
1996年 福井医科大学医学部眼科 入局
福井医科大学医学部眼科 助手
2003年 米国ネブラスカ大学眼科 留学
2009年 福井大学医学部眼科 講師
2012年 福井大学医学部眼科 准教授

後天性失明の原因として、糖尿病網膜症は緑内障、網膜色素変性症に次いで第3位に後退したと言われる。内科と眼科の医療の進歩が実を結んだものと考えることもできるが、なおも働き盛りの世代における主要な視力障害の原因であることに変わりはない。糖尿病による失明の要因は、牽引性網膜剥離、虚血による萎縮、糖尿病黄斑浮腫(Diabetic macular edema:DME)、血管新生緑内障(Neovascular glaucoma:NVG)など様々である。糖尿病による失明を防ぐためには、まずその原因を同定することが重要である。

今回、我々は視覚身障手帳を取得した糖尿病患者の実態調査を全国的に行い、糖尿病における視覚障害とNVGやDMEなどの眼合併症との関係を明らかにした。NVG、DME治療においては、抗VEGF療法やインプラントの進化と一般化が患者を失明から救う上で重要なカギを握っている。

本セミナーでは、これらの治療に関する新たな知見をアップデートし、糖尿病による失明から患者を救うための手段を共に考える機会としたい。

講演2

Diabetic Retinal Diseaseという考え方：これからの糖尿病網膜症診療

演者

中尾 新太郎 先生

順天堂大学大学院医学研究科眼科学 主任教授

【略歴】
1998年 鹿児島大学医学部 卒業
九州大学医学部眼科学教室 入局
2000年 九州大学大学院医学研究院(医化学分野)
2004年 同修了 博士(医学)取得
2006年 米国Massachusetts Eye & Ear Infirmary 留学
2013年 九州大学病院眼科 助教
2017年 九州大学病院眼科 講師
2020年 国立病院機構九州医療センター眼科 医長
2022年 九州大学大学院医学研究院眼科学分野
臨床准教授
2022年 順天堂大学大学院医学研究科眼科学 主任教授
順天堂大学医学部眼科学講座 主任教授(併任)

糖尿病網膜症診療はこの20年で劇的に進歩してきた。抗VEGF療法、ステロイド治療、低侵襲硝子体手術などにより、以前では失明を免れなかった症例を救えるようになった。しかし、日常診療では見えづらさを訴える患者さんは決して少なくない。例えば、汎網膜レーザー光凝固治療により、網膜血管病変は落ち着いていても、視野の狭窄や夜盲を訴える症例や、硝子体手術成功例でも長期的に視機能低下を生じる症例などである。これら症例は、現行の糖尿病網膜症治療がターゲットとしている血管病変はコントロールされていても、網膜神経障害が進行していると考えられる。

近年、米国眼科学会を中心として提唱されている"Diabetic Retina Disease"という概念は、従来の病期分類にある血管病変に加え、神経病変を考慮したものとなっている。現時点では、網膜神経障害を評価する検査は確立しておらず、治療法もないため、糖尿病網膜症診療におけるアンメットニーズとなっている。Diabetic Retinal Diseaseの確立には、さらなる病態解明とそれに基づいた検査と治療法開発が必要となる。

本セミナーにおいて、このDiabetic Retinal Diseaseの現時点を解説し、これからの糖尿病網膜症診療について考えてみたい。